

## 面わ頭つ

広島大学大学院教育学研究科  
国語文化教育學講座 編

### ■前言

本講座では、広島大学名誉教授野地潤家先生よりご蔵書ご寄贈のお申し出をいただき、平成21年4月から月一回のペースで大学への搬入を行っている。午前9時にお宅を訪ね、一時間程度の間、書庫で選んでくださる書籍を段ボール箱に収納し、平均で十二、三箱ほどを車に積み込むのだが、その後、奥様（二枝さま）のお接待をいただきながら約一時間、先生のお話をうかがうのが恒例となっている。話題は実に多岐に亘り、それが訪問の目的のようになっていった本年4月、折角だからということで、5月からはICレコーダーを持ち込んで録音することとした。もちろん、先生のお許しを得てのことである。

大正9年1920年11月4日ご誕生の野地先生は、本年満九〇歳をお迎えになる。数えて九一歳、すでに卒寿を越えておられるのだが、お声の艶、緩急強弱の妙、なめらかさ、力強さ、いずれも先生のご講筵に列した頃（私は40年近く前）と変わるところがない。もともとは、そうした先生の肉声を記録し、ご希望の方々にはCDに焼き付けてお届けしようというのが趣旨だったのだが、お話の内容は現在の大学院生たち、また、広く国語教育研究に携わる方々に多くの示唆を与えるはずと思いうにいたり、このたび抄録の形で活字化することとした。

活字化に際しては、

- ・野地先生の発話はすべて文字化する。ただし、重複する話題など、一部省略する場合がある。
  - ・話題ごとに、適宜、標題を付す。
  - ・聞き手の発話は省略する。ただし、脈絡を理解する上で必要な場合は概略を「」括弧内に記す。
  - ・お話の途中で拝見した書籍は、その折ごとに○印を付して示す。
  - ・話題中、注記の必要な事柄については○括弧内に補記し、分量の多い場合は当該個所に\*印及び番号を付し、各段末尾に記すの措置を施した。
- 今回は5月16日、7月24日の二回分である（6月は事情があってお話をうかがう時間をもてなかった）。  
（第I回担当 竹村信治）

### ※参考文献

『野地潤家先生に学びて』（野地潤家先生御退官記念事業会、溪水社、昭和59年8月）所収「野地潤家先生略年譜」「野地潤家先生著書・論文等目録」

\*「面わ頭つ」は、以て語りの景を偲ぶよすがともなればと、歌集『柿照葉』

（溪水社、昭和50年）所収歌から竹村が撰んで題とした。

■平成22年5月16日（録音時間46分50秒）

●著書

【本日の搬入作業補助大学院生は高知大学で渡辺春美氏の指導をうけました。】  
今度、あれは『語文と教育』ですかね、渡辺先生が出しておられる、研究会から出されている、それが第10号になるんだそうです、今度、それで、わたくしにも是非原稿を寄せてほしい、といわれて。それで、国語科の授業をどういうふうに求めてきたかっていうことを、「国語科授業を求めつづけて」っていうことで、ちょうど原稿用紙で三〇枚にまとめたんですがね。【間】（渡辺氏は）もともとは、広島大学では体育に入って、それから国語科に転科して、で、香川の方に就任して、大阪の方に出てっていう……。それから沖縄の方へ、国際大学に。そして高知、ということでしたな。

- 『国語教育原論』（共文社、昭和48年）
- 『国語教育学史』（共文社、昭和49年）
- 『国語教育通史』（共文社、昭和49年）
- 『読解指導論—琴線にふれる国語教育—』（共文社、昭和52年）
- 『話しことば学習論』（共文社、昭和49年）
- 『作文指導論』（共文社、昭和50年）
- 『個性読みの探究—読書指導を求めて—』（共文社、昭和53年）
- 『国語教材の探究』（共文社、昭和60年）
- 『国語教育の探究』（共文社、昭和60年）
- 『大村はま国語教室の探究』（共文社、平成5年）

これが『国語教育原論』でしょ、これが『国語教育学史』、これが『国語教育通史』、それから『読解指導論』、『話しことば学習論』、それから『作文指導論』、それから『個性読みの探究』、これは読書指導。それから『国語教材の探究』、『国語教育の探究』、『大村はま

国語教室の探究』、ここに『国語科授業論』（共文社、昭和51年）というのが入るんですがね。

国語教育を一生の仕事にして、取り組んで、しかも国立大学ではじめて国語科教育を担当するように、というふうにいわれて、始めたものですからね、非常に責任が重いということもあって、したんですが。

ただ、これらの書物\*1を出しました共文社の社長さんというのが、広島のご出身なんです。大学ではなくって。それで、うちまで来ていただいて、「国語教育の本を出したいから」。（共文社という出版社は）大村はま先生の『教えるということ』（共文社、昭和53年）という名著を刊行されたんですけど。もともとは、研究書というのは、そう出版を、気持ちでは決めてたんです。けれどもそういう方と出会えて、うちまできていただいて「是非、国語教育の論文を、研究をまとめて、『原論』、『学史』、『通史』、それから『読解指導論』、『話しことば学習論』、『作文指導論』、『読書指導』っていうのは『個性読み』として。それから『国語科授業論』は、ここ、いま入れてないんですが。『国語教材の探究』、それから『国語教育の探究』、『国語教育の探究』ってのは広大を終わる時点での最終講義を収めているんですがね。それから、大村先生のことを取り上げて書かせていただいた『大村はま国語教室の探究』。【間】このほかに明治図書から「個体史研究」というのを（『野地潤家著作選集』第1〜4巻）。全集はむずかしいから選集として、全一三巻に、別巻も含めて全一三巻に明治図書から出していただきましたね\*2。これは共文社から。で、もう一つの方は明治

図書の方からというふうには、出していただいたんです。もう、寝ても

覚めても国語教育から離れないで、やってきましたからね。

\* 1 国語教育研究叢書（共文社）。

\* 2 『野地潤家著作選集』全一三巻（本編一―一巻十別巻二巻、明治図書、平成10年3月）。

### ●『奥の細道』のレトリック

「先生は国語教育以外にも幅広くお書きになっていきますね。『言語生活』の「現代文学と方言」の特集号（筑摩書房、昭和31年10月）では、「井伏鱒二の作品の中国弁」をお書きになっているし、『季刊／国語教育誌』（全日本国語教育学会、第1巻第3号、昭和46年11月）の「言語表現における思考と創造の関連―芥川龍之介の震災に関する文章群を中心に―」では、芥川龍之介の関東大震災に関する7つの文章を取り上げて論じておられます。特に後者の、芥川の関東大震災関連の文章をとりあげるといったことなど、どのようなきっかけでそうした着眼を得られるのですか？」

はじめからそういう腹案をもっているわけではないんですがね。ただやっぱり、文章化もしておりますけれども、芥川龍之介という人が関東大震災のことをこう、一度か二度とか言うことではなくって、求められて書かれているんですね。それが一つとして重複がない。ダブるところがなく全部、関東大震災を被災したのは龍之介という人なんですけれども、そのことを、被災したことを、関東大震災のことを書いてほしいと頼まれて、それぞれの依頼をうけて送った文章というのをずうっと念のため集めてみますと、一つとして同じことがないですね。で、一つとして同じことがないというのは芭蕉と同じ。芭蕉の文章意識と同じなんです\*1。

たとえば塩竈神社から松島の方へいくときに、もう昼に近くなったので「船を借りて松島にわたる。その間二里余、雄島の磯につく」\*2という。それから松島の本文に入って、「そもそもことふりにたれ

ど松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭西湖を恥ぢず。東南より海を入れて江のうち三里浙江の潮をたたふ」。そして、その次のあたりに「雄島が磯は、地つづきて海に出でたる島なり」という。塩竈から松島へ入って、着いたときは「雄島の磯」なんです。それから、松島の本文の非常に格調高くして張りつめた文体になってきているところは「雄島が磯は」。「雄島が磯」、「雄島の磯」じゃないんですね。そうするともう力が抜けてしまつて。

で、あそこにもずらつと、『奥の細道』関係の、その書棚にも、ずらつと入れておりますが、気がついてみたら初めから終わりまで、全部すらすらいえるようになっていたんですね。『細道』の全文暗唱が、できて。それは、こちらが学生時代から、高等師範の一年生でおそわつて、ずうつと繰り返し繰り返し読んでいくうちにふつと気がついたら、初めから終わりまで全部すらすらいえるようになっていたっていうのは、こちらの暗唱する力でなくって、そのようにこう、芭蕉の文章が磨き上げられているわけですね。

それから、「立石寺」で「閑さや岩にしみ入る蟬の声」っていう、立石寺のところでは、「山形領に立石寺という寺がある」と、「非常に、いいあれだから是非そこに寄っていくように」というふうには勧められたので、「尾花沢よりとつて返しその間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。ふもとの坊に、宿借りおきて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年旧り土石老いて苔なめらかに、岩上の院々扉

を閉ちて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて仏閣を拝し、佳景寂  
寞として心澄みゆくのみおぼゆ。閑さや岩にしみ入る蟬の声」、こう  
いうふうになつてゐるわけですね。そういう、こう、繰り返しよん  
でいけばすらすらいえるようになるという……。その「尾花沢よりと  
つて返し、その間七里ばかりなり」。それが『細道』の旅のずつと  
おしまいころになりますと、敦賀の所から、次の所へ出ていく時つて  
いうのは、いろ（種）の浜の方へ、もうおしまいですけれども、そこ  
へ着くという時には、「海上七里あり」つていうふうには、『細道』の  
文章のなかでは二度と同じ言い方つてのは、ないんですね。

で、中国のレトリックというのに、やはり、その「同じ繰り返しは  
いけない」と。「かならず変化させて、その時その時に、ぴったりし  
ているように、描いていかなきゃならない、文章化していかなきゃな  
らない」という。それを本当によく守つてゐるのは、芭蕉という人だ  
という、そういうこともありましてね。

それから、たとえば、雲岸寺で「木啄も庵は破らず夏木立」と、  
とりあへぬ一句を柱に残しはべりし」というふうには、書いてゐるん  
ですが、ずつとまわつて、金沢をへて北陸の方へまわつてからは、朝  
起きてこれから旅立つというときに、お寺に泊まつて、明けて留まつて  
いるときに、俳句を書いてもらおうと思つて、お寺の若い人たちがず  
つと紙・硯をもつて、階段の所まで来るんですけれども、「庭掃いて  
出でばや寺に散る柳　とりあへぬさまして、草鞋ながら書き捨つ」。

「と、とりあへぬ」と「はなれん」です、そこでは「木

啄も庵は破らず夏木立　と、とりあへぬ一句を柱に残しはべりし」と  
いうふうには……。

こう突き合わせてみると、一箇所として、同じ繰り返しというの  
は、『細道』の文章ではなされてないんですね。そういうところま  
で、繰り返し繰り返し読んで、『細道』の文章を磨き上げて、芭蕉と  
いう人が磨き上げているという、そういうことが、ずつと、具体的な  
あれ（文章意識）になつてくるんですね。【間】気がついてみると、ほ  
んとに隅から隅まで『細道』の全文を、そういうふうにあれ（磨き上  
げるとのこと）しておられますね。

【それは声に出して朗誦するときにお気づきになるんですか。避板法のレトリ  
ックになつてゐることを。】

自分でこう読んでゐるうちに、全文が頭に入つて、読むと次から  
次から出てくるでしょう。そうすると、こことここと、自然に、比  
べるといいですかね。ほんとに一つとして同じ繰り返しが出てこない  
んですね。「木啄も庵は破らず夏木立　と、とりあへぬ一句を柱に残  
しはべりし」というふうには、あるんですが、「庭掃いて出でばや寺に  
散る柳　とりあへぬさまして、草鞋ながら書き捨つ」。「と、とりあ  
へぬさまして」「じゃないんですよ、こう見ますとね。そういうとこ  
ろ、ほんとに隅から隅まで、こう自分の、『細道』の文章を磨き上げ  
るといふことを、ほんとに本気になつてやられてゐるんだなつて思  
いますよ。

\* 1 ここでお話に関連する先生のご論考に「芭蕉の修辭意識―おくのほそ道を中心に―」（『國文学攷』25号、昭和36年6月）がある。

\* 2 『奥の細道』本文の表記は、野地先生の朗誦本文に等しい日本古典集成『芭蕉文集』所収「おくのほそ道」に拠つた（底本は日本古典文学大系と同様、素  
龍清書本で、さらにこれに表記等の校訂を加えたもの）。ただし、先生の朗誦の調子を再現する便宜として、句読点は改めた。以下同。

● 広島高等師範学校での『奥の細道』授業（岡本明教授）の思い出

学生時代に、高等師範\*<sup>1</sup>の一年生で『細道』の、一年生と違います。二年生かな、一年の時は平家物語、だったから……。【問】で、わたくしは、平泉のところは、その五十音で、出席番号順にいきますからね、五十音で……。【問】その……。【問】「五月雨の 降り残してや 光（ひかり）堂」という、それを「五月雨の 降り残してや光（ひかる）堂」というふうにわたくしは読んだんですね。と、先生が、指導して下さいる岡本明先生\*<sup>2</sup>が、「ひかりどう」というふうに、言われまして。で、「ひかりどう」と訂正をして。それからその次、もう一つおしまいにもた、「五月雨の降り残してや光（ひかる）堂」といった、読んでしまったんですね。と、先生が、「ひかりどう」というふうに穏やかにいってくださった。そのもう一つ前に、全部報告し終わった時に「たいへんよろしい」という、そういう評価が、担当して終わるとおっしゃってくださいました。その時、一番認められた場合は「たいへんよろしい」という言い方で。「たいへんよろしい」というふうにいっていただいてんですが、「ひかりどう」といわないで「ひかるどう」といって。「ひかるどう」というところは「ひかりどう」、「ひかるどう」じゃない「ひかりどう」だ」という御注意をうけたのに、また「ひかるどう」といってしまった時に、先生が、非常に穏や

かに「ひかりどう」といって。まだ耳に残っているようなんですけれども。もし、「注意をしたのに、もっときちっと気をつけてやってなきやだめだ」というように、そこで、あの、小言といえますか、お叱りをうけても当然のことだったんですけども、非常に穏やかに、「ひかりどう」と。注意をうけておりましたのに、それが守れないで「ひかるどう」といってしまった時、「ひかりどう」と。

そういうことで、もしその時、やはり「そんな不注意で、間違った読み方をしては駄目だ」というふうに、一言でも二言でも、おっしゃられたら、おっしゃられるのは当然のことなんですけど、もうおっしゃられましたら、『奥の細道』の平泉の所を担当した時の印象というのはやはり、いくらか暗いものになっちゃったと思うんですけども。その時非常におだやかに、「ひかりどう」というふうにいっていただいて、それ以上、「不注意でそんなことではだめだ」とかかっていうことは、一切おっしゃらなかつたっていうのが、授業をうけた側として、その指導にあたってくださった先生のそういう、温かいお気持ちというのが、ずっと残っておりますねえ。ご注意をされても当然のことなんですけれども。その時……。

\*1 野地先生の広島高等師範学校入学（文科第一部）は昭和14年1939年4月のこと。同年10月1日、広島文理科大学文学科（国語学国文学専攻）入学（『野地潤家先生に学びて』所載「野地潤家先生略年譜」並びに護持」、指導教官は岡本明教授。同年10月1日、広島文理科大学文学科（国語学国文学専攻）入学（『野地潤家先生に学びて』所載「野地潤家先生略年譜」）。

\*2 明治28年1895～昭和38年1963、京都府生。京都師範学校、広島高等師範学校、京都帝国大学、卒業。昭和4年広島高等師範学校教授、昭和25年広島大学文学部教授。広島大学名誉教授。雅号、四明。野地先生は、昭和14年の高等師範学校入学時に岡本先生主宰の短歌結社「言霊」に参加された（『野地潤家先生に学びて』所載「野地潤家先生略年譜」）。歌集「紺青」（昭和31年）「黄雲」（昭和32年）のほか、『去来抄評釈』（昭和24年）がある。『國文学論叢』11号（龍谷大学、昭和39年8月刊）は岡本明先生追悼号。そこに掲載の「四明岡本明先生年譜」によれば、3月15日の逝去。享年六九歳。

## ● 広島大学最終講義での家族

これ、『国語教育の探究』に、広島大学での最終講義\*1を収めているんですけどね。

最終講義は、案内は出しますけれども、出席される方というのを、どういう方がお見えになるというのは確認していませんね。ですから、どんな会場へ、広島大学の教育学部の会場へ入ってこられるという、(その時)ひよいと思いつきましてね。出席者の、どなたが聞きに来て下さるのかということ、それを登録してないわけですから、それで、カードを配って、「すみませんが、今日の、その最終講義についての感想を書いていただけませんか」というふうにして、それをお配りしました。四〇〇人か\*2、ほとんど大講義室が一杯になっていましたから。それで、そのカードを、同僚の方、それから卒業生の方というふうにして(区別して)。それをこちらでは、仕分けができませんからね。

そういうふうにしてますうちに、是非これは、講義の方は録音して記録に残っているんですけども、感想の方はあれだからということ、それをずっと、同僚の方、卒業生の方というふうにして、『最終講義を聴いて』\*3という一冊の本に、これも珍しいんですけどね、それをしました。

\*1 講義題目「国語教育研究の拠点と方法」。昭和59年2月25日(土)。広島大学教育学部第一一〇号教室(大講義室)。

\*2 『最終講義を聴いて—贈る言葉—』には四一〇枚のカードが寄せられたとある。

\*3 『最終講義を聴いて—贈る言葉—』(深水社、平成8年)

## ● 『幼児期の言語生活の実態』(一)

○ 『幼児期の言語生活の実態』(全四巻、文化評論出版、昭和48~52年)

あそこにありましょう、『幼児期の言語生活の実態』というのが。

受付で、来場された、来られた方の名簿を作ったというふうなこと、慣例としてないもんですから、そういうことにはしないで、というふうにして、ひよっと思いついて、カードをお配りして、感想を書いてもらおうっていう。で、あとで見ますと、わたくしの長男(澄晴氏)も長女(玲子氏)もっていうふうには、家内は孫のお守りなどで出られないってことだったんですが、身内のそれも来てたんですね。

長男は生物物理を専攻しておりますので、人文学の方の、わたくしの「研究の拠点と方法」、どういうふうにして国語教育の研究に取り組んできたかということ、三〇年間勤めましたから広大に、そこでしたことをずっと述べるというふうにして。で、「生物物理を専攻している長男は、かなり、わたくしの講義では、物足りないというか、そういうあれがあるのじゃないかな」と。まあ聞きにきてくれたのはいいんですけどね、そういうふうには思っていたんですが、書いたカードをみると、「たいした講義でした」って。(笑) 「ああ、やっぱり……」。

どういうふうにして国語教育に取り組んできたか、ずっと述べるというふうにしたんですけどね。

四巻。これが長男の言葉を、昭和23年の3月9日生まれなんです、満六歳までのそれを、このようにあれしました。【間】情報カ

ードにこう書き取っていつてというふうにして。それはやはり、西尾実先生が、「子どもの言葉の実態というのをしっかりとらえていなければ、子どもの言葉を指導すると、そういう国語教育をしていくっていうことは本格的にはなかなかできない」という意味のことを、お書きになっておりましたので\*1。ただ、録音機はまだ昭和20年代の半ばにはほとんど、当然のことですが普及していませんでしたから、速記法で採りまして、あとそれをまとめていくように……。

速記法で採らなくて普通の言葉で採るとした場合にも、実際に学校へ、高等師範学校へ教官として出ている間は採れませんでした、それは、家内の方に頼んでいたわけですね。で、わたくしが朝、出勤するときには「カードとつといてね」といつて、出ていくわけですね。それを見ている長男が見ていたわけですね。「家を出る時は「カードとつといてね」といつていうふうには、あんなふうにして父親は出ていった」と。で、本人が遊びに出るときに母親に向かって、「かあちゃん、カードとつといてね」(笑) カード採れない。(笑) 本人が、飛び出すわけですからね\*2。

高知におります、次男(照樹氏)の方とは、二つ違いなんですけどね。その、夏みかんのころになりますと、夏みかんのあれしてこうわたくしが……、そうすると夏みかんの皮を剥くのが非常に上手だということ、長男の方が「おとうちゃんは夏みかん先生よね」といつた。そしたら急に、二つ違いの弟の方が、心配そうな顔になりましたね。

「夏みかん先生よね」といつたのを聞いて、心配そうになって、『どうしてかな』とこちらは思っていたんですが、ちょっと時間をおいて、「おとうちゃん」ていいいますから、見上げて「おとうちゃん」といいいますから、「はい」。「それみてごらん、おとうちゃんでしょ、ちえんちえい、ないよ」って\*3。(笑)

また、母親が採ったカードには、「今朝は足袋をはかずにいるとつめたい」といつうふうに独り言をいつてたら、長男が、基町の市営住宅に入ってたんですが、衣紋掛けの所から着物をもつてきて、だまつて母親のうしろから、こうかけた。で、「この時、涙が出そう」といつうふうに、付け加えているわけですね。母親としましてはね……。そういうあれが……\*4。

朝食の時間になりますと、もう、「おかあちゃん、おかわり」といつて、茶碗を出します。すると次男の方が、すこし遅れ気味に「ほくも」といつて出して、「あとからいうほうがいいね、みじかくてすむから」。(笑)「あつ、助詞の『も』というのは、こういうふうにして、こう習得していくんだな」ってことを、目の前であれしませてね\*5。

「夏みかん先生よね」ていつうのは、もう二歳違いで、長男は夏みかんの皮をむいて自分たちにくれるのが非常に上手だつていつことを、うけとめて言っているんですが、「おとうちゃん」「おとうちゃん」つていつているのに他の言葉が入ってきたもんだから、次男としては非常に心配になったわけですね。それでしばらくして「おとうちゃん」といつたら「はい」と。「それごらん、おとうちゃんでしょ、ちえんちえい、ないよ」「夏みかんちえんちえい、ないよ、ちえんちえい、ないよ」とかいつて……。

結局、言葉採集しながら、言葉の習得の、普通は見逃してしまつたりしていつことを、受けとめることができましたからね。

【速記術は、どのようにしてお習いになったのですか。】

広島県の社会教育課の方で、勤労青年のための事業として……、戦争のために疎開で東京から帰つて、議会の速記者をしておられたお二方が帰つておられます、そのお二方が自分の専門の速記術というのを、広島県の働いている勤労青年のためのコースとしてしてはいつうこ

とになって、それが中国新聞に出たのです。夕方の5時からですから、わたくしの勤務時間外になりますので、わたくしも申し込んだんですね。

そうしますと、わたくしの年齢を見られましてね、「三千も四千も速記符号つていうのを覚えていかなきゃいけないから、歳をとつていると無理かもしれせん」というふうにいわれたんですが……。初級三ヶ月、中級三ヶ月、上級三ヶ月と九ヶ月間。その、修了するときにわたくしが受講生代表で、成績を認めていただきましたね、あれをしたんですが……。そういう、速記がすごく役立つて、こういうことができたんですね\*。

で、それを小学校へあがるまでずっと採りまして、カードはもうそこでおわりまして、それからあと、原稿用紙にずっと書き付けていくわけですね。【問】

【元原稿を、前回(平成22年4月3日)頂戴しました。】そうですね。

で、先行研究としてはアメリカとドイツが一番進んでいたんですけども、いままでのところアメリカにもドイツにも、この満六歳までのことを具体的にずっと記録して整理したってものはどうもないようです。ワシントンのアメリカ国会図書館の地下の図書室に行きますと、全四巻がずらりと並んでいて。日本よりもアメリカの方が早いですね。そういう成果というのに非常に敏感にあらわしてましてね。

アメリカのイリノイ大学のデータベースに、各国の幼児言語の研究のデータをおさめてあるらしんですね。そのイリノイ大学から、出版しました文化評論出版の方へ、「是非これをむこうのイリノイ大学のデータベースにおさめさせてほしい」といわれて、当然、「どうぞどうぞ」ってことなんですがね。原爆で破壊されました広島ですけども、そこで幼児期をすごした子どもの言葉つていうのを全部収録

して、それを世界へ、発信していくといえますかね、そういうことができる。

【今も『児童心理学の進歩』という年間の成果をまとめる時に「スミハレ・データ」というのが紹介されます。ローマ字でスミハレですが。世界にいくつあるデータベースの一つとして。】そうですね。

何度かお話したことがあると思いますが、五年一ヶ月くらいでしたかね、朝食の時に「ご飯をこぼしていたんです。で、母親が、「お兄ちゃん、こぼしなさんな」といったんですよね。そしたら、「お兄ちゃんがあんなにいうから、ごはんつぶが腹をたてておちるじやないか」(笑) 母親の方は返す言葉がなくなった。(笑) そういう場面がありましたですね。ごはん、こぼしたわけなんです、朝食の時に。そうしたら「こぼしなさんな」というふうには、母親は言ったんですが、何かその「こぼしなさんな」といわれたのが、本人としたら、『おいしく朝ご飯をあれしていたのに』ということがあったんです。うかね。わたくしはすこし離れて聞いていたんですが。「かあちゃんがああいうから、ごはんつぶが腹をたてておちるじやないか」といつて。(笑) \*7。

やっぱり、あの衆議院、むかしは参議院でなくて貴族院でしたが、衆議院貴族院の速記者を務めていた方が、広島に帰られて県議会市議会の、速記のことをなさつていて、自分たちの専門のそれを地元の青年の、勤労青年のために役立ててもらおうことができるといふのを思い立たれて、県の社会教育課と連絡をとつて始められたわけですね。やっぱりその試みがあつて、戦争が敗戦に帰して専門速記者が広島へ帰っておられたということが、わたくしにとつては世界ではじめての仕事……。速記がいらないとできませんからね、データが採れませんから。



\* 1 西尾実「文芸主義と言語活動主義」(岩波講座『国語教育』4「国語教育の方法的機構」、第6回配本、昭和12年3月)、「談話生活の問題とその指導」(『季刊国語学』第1輯、国語学会、昭和23年10月)、等。なお、昭和18年2月7日の講演「国民科国語の教育について」(信濃教育会主催。後、『国語教育者の歩み』西尾実先生 実践指導記録)信濃教育会出版部、昭和34年11月)中の「国語教育の方法」、参照。

\* 2 昭和25年12月16日(二年一〇ヶ月一八)『幼児期の言語生活の実態』Ⅱ(昭和48年4月) 896頁上段。ほかに、昭和26年2月18日(二年一二月一〇)『同1058頁上段』、昭和26年2月27日(二年一二月一十九)『同1077頁上段』にも。

澄晴君(昭和23年3月9日誕生)の「カード」の明確な発話は昭和25年5月3日条(二年二ヶ月一五)『同124頁下段』。照樹君(昭和25年1月16日誕生)は昭和27年3月19日条(二年三ヶ月)『『幼児期の言語生活の実態』Ⅳ(昭和51年1月) 15頁下段』。

なお、父(野地先生)の母へのことばをまねた発話は、昭和25年10月18日条「ボク カード トッテル ジャ カラ。(↓母)」「同1725頁上段」、10月20日条「エンピチュ カシテ。(↓母)」「チョット マツテ。カード カイタラ カシタゲルカラ。(母)」「キョー ナニ ユータ ノ?(↓母)」「チャツ キ ナニ イッタ?(↓己)」「同1730頁下段」にすでに見えている。

澄晴君のことば採集カードについては、昭和26年7月8日条『『幼児期の言語生活の実態』Ⅲ(昭和49年10月) 262頁上段』、同23日条『同1730頁下段』、8月23日条『同1736頁下段』、昭和27年1月21日条『同1763頁下段』、同2月27日条『同1770頁下段』、昭和28年8月15日条『同1783頁上段』等、参照。

また、「オトーチャン ガ イルト ウレシイ ウレシイ。(↓父)」の類は昭和26年5月22日条『同1739頁下段』、同7月12日条『同1769頁上段』などに多くあり、一方「モー アサ カラバン マデ ガツコー ニイク ナ。(↓父)」の類も同9月14日『同1740頁下段』等に散見される。

\* 3 未詳。照樹君の発話にかかわる話題であるので、澄晴君のことばを採集した『幼児期の言語生活の実態』には記録されなかったか。なお、照樹君のことば採集について、昭和25年5月29日条に、「テルキチャンノ カードワ トラナイネ。(父↓母)」「ナカナカネ。(母↓父)」「ナカナカネ。(↓母)」「同1728頁下段」と見えるが、昭和27年3月1日条『同1710頁上段』によれば、採集は行われていた。

なお、類似の話題に、昭和28年6月26日条「オリカミワ オカーチャンカ センサー ヨ。(父↓)」「同1744頁上段」を承けての、昭和29年1月24日条、「モー スク オリカミノ センサーノ ゴハンカ スムカラネ。(父↓)」「オカーチャン?(弟↓父)」「ウン。(父↓弟)」「オリガミセンサー オシエテ クダサーイ。(↓母)」「同1761頁上段」の会話がある。

先生が夏みかんの皮を剥く場面は、昭和26年4月7日『同1750頁上段』、同19日『同1771頁上段』のほか、昭和28年6月7日条、「午前九・〇〇ころ。夏みかんを切りわけている時、弟(照樹)に向かつて……」「マダ タベタラ イケン ゾ。センサー ガ ユー マデ。(↓弟)」「ボク センサー ジャケ ン エー ネ。(弟↓)」「オー。(↓己・弟)」「同1742頁下段」がある。

照樹君の「チェンチェイ」発話の初出は昭和27年2月20日条(二年二ヶ月)の「テルキチャン オイデ。ガツコー イイコー。ボク センセイヨ。(↓弟)」「ウン。チェンチェイネ。(弟↓)」「同1769頁上段」。澄晴君の「チェンチェイ」発話の初出は昭和25年3月8日(二年一二月一八)『『幼児期の言語生活の実態』Ⅰ(昭和52年12月) 389頁上段』。

\* 4 昭和25年2月22日(一年二ヶ月―14)【同I 358頁上段】。

\* 5 未詳。注3と同様の事情か。

照樹君の助詞「モ」の使用は、昭和27年6月30日(二年六ヶ月)の「シロイ チョーチョモ キーロイ チョーチョモ トッテー ネー ニーチャン。(弟 ↓)」「同IV 133頁上段】のほか、同年8月4日(二年七ヶ月)の「サルワ ナニ?(父 ↓)」「ドーブツエン ニ オッタ オサルサン ヨ。(父 ↓)」「ボク モ ミタ ネ。(弟 ↓)」「ウン。(弟 ↓)」「同IV、157頁下段】に見える。澄晴君の「モ」使用は、昭和25年5月11日(二年三ヶ月―3)の「ボクワ ミカン ノ ホーガ インデショー。(母 ↓)」「リンゴ モ イー。(母 ↓)」「同II 175頁上段】のほか、昭和26年4月20日(三年二ヶ月―12)の「ヨク タベルデ ショー コノ コワ。(母 ↓父)」「ボク モ ヨク タベル。(母 ↓)」「ボクモ ヨク タベル ネ。(母 ↓)」「同III 74頁上段】がある。

\* 6 野地先生の速記学校受講期間は、昭和24年11月〜同25年7月(『野地潤家先生略年譜』)。なお、先生はNHKラジオ放送(放送討論会、ニュース解説、等)を記録して速記術の習得に努められたが、そのことに関わる記事は昭和25年2月12日条【『幼児期の言語生活の実態』I 339頁上段】にあり、修了の同年7月以降も10月17日、昭和26年1月10日、同13日、6月1日、同10日、同19日、7月3日、同22日、昭和27年1月1日等に見える。

\* 7 昭和29年2月5日(五年一ヶ月―28)【『幼児期の言語生活の実態』IV 619頁下段】。

### ●『話しことば教育史研究』

○『話しことば教育史研究』(共文社、昭和55年)

これが、『話しことば教育史研究』。読むことの教育の歴史、それから作文、綴ることの教育の歴史の、それは、あるんですけれども、話しことばの指導っていうのはずっとおそく始められましたので、話しことばの教育の研究というのは、ないわけですね。それで、読むことの教育の歴史、綴ること書くことの教育の歴史ってのはあるけれども、話すことの(教育の)歴史はない、と。「話すことの会」などは、明治の初め、福澤諭吉っていう人が先頭に立って進められたということなどがあって\*1、慶應大学の三田記念館などにはそのデータが収められているっていうこともありまして、それを明治、大正、昭和と、ずっと話しことばの指導がどういうふうになされたかということ、

\* 1 「三田演説会」(初回：明治7年6月27日、第40回：明治32年12月9日)。「話しことば教育史研究」I「明治前期話しことばの教育」2「福沢諭吉の話しことばの教育」、参照。

つと、資料を蒐集しながら、それを分析してまとめていったわけですね。今の総理大臣の鳩山家の人たちが、明治10年代の半ばには、こゝろでこの演説をどういうふうにしていくのか、会議をどうまとめていくのかというようなことを、鳩山家などはやく取り組まれたほうなんですけど\*2。そうして、これが、わたくしの学位論文(『近代国語教育史研究』昭和41年、広島大学)の第二編にあたる。第一編が実践史研究、で、第二編が、読むこと、綴ること、書くこと、読むことの歴史研究はあるのですが話すことの教育の歴史研究というのは全然なかったんですから、それを掘り起こしてまとめるといふふうにしたんですね。

\* 2 鳩山和夫『會議法』（小笠原書房、明治15年10月）。なお、『話しことば教育史研究』I「明治前期話しことばの教育」4「明治前期における會議形態の成立過程」6、参照。

■平成22年7月24日（録音時間58分17秒）

●書庫をめぐって

「御蔵書の多さをあらためて実感しております。書庫をめぐってお話などお聞かせいただけますか。」

はじめ基町の市営住宅\*1のありましたから、書物の置き所がなくて、研究室も一杯になるし、家の方も住宅の六畳一間くらいしか余裕がないってことでした。それで、ここへ三〇平米のこの書庫をあれて、おきまして……。

もうお話ししたことがあると思いますが、埼玉大学の方にお勤めになっておりました井上敏夫先生、いらして、それで、書棚のところに、垣内松三先生の『国語の力』っての、40版、初版以来40版重ねられたんですが、それを、『国語の力』を考察の対象にする限りはやっぱり、第1版から第40版まで、全部、一応手元に、考察する資料としては揃えなければということで、古書店へ行つて『国語の力』っていう本が見つかると、もう全部それをもとめるようにして、書棚へ入れたんですね。それで、何冊あつめたかは、こちらは、確かめていない、まだ蒐集している途中だというふうに思いますから……。井上敏夫先生は、『野地さん、『国語の力』、二六冊あるよ』。（笑）もう二六冊は、四〇のうちの、二六にならないかも知れない、ダブっているのがあるかも知れません。それがあります\*2。

\* 1 広島市基町北区550。『幼児期の言語生活の実態』II「あとがき」、参照。

\* 2 野地先生の『国語の力』研究は、『野地潤家著作選集』II「垣内松三研究―「国語の力」を中心に―」にまとめられている。

それから、大村（はま）先生、お見えになりました、かなり、奥の方までずっといらつして、こう書棚から出しては、ご覧になっていましてね。それで、「わたし、ここに、留学したいわ」って。（笑）いまでも耳に残っていますからね。（笑）そのおっしゃる一言がね、一言の、こちらに、響いてくるものが……。『あつ』と思いましたが、うんね。その、やっぱり、教えるだけでなくて、学びたいという、そういう気持ちを、ずっと大村先生お持ちなんだっていうことがそれで伝わってきますので。「わたし、ここに留学したいわ」とかって、かなり奥のほうの……。

それから、日本国語教育学会の会長などをしてられます倉澤榮吉先生、「野地さん、いずれは公にしてください。」「自分だけの独り占めに、この本は、集めた本は自分だけの独り占めにしないで、公にしてほしい」というふうに、この、広い大きな立場からですね。だけど独占欲で蒐集する人も、なかにはおられますからね。こう、自分で集めることに集中されて、それをどう大勢の人に活用してもらおうかっていうような、そこまでは思い及ばないという場合もありえますので。【間】まあ、広大の方で、皆さんで、気持ちよく、こう受け取っていただける、というふうになって、まあ、やっぱり何よりですね。

## ●国語教育関係の文献資料調査

国立大学の教育学部で国語科教育、なにに教育、教科教育が専門の科目になったという、その最初でしたから、これも前にお話ししたことがあるかと思いますが、やはり、国語教育関係の文献資料を、明治の初めから、ずっと、昭和の戦後までのところ、とにかくそういう資料を集めなければならぬということがあったわけですね。国文学国語学は、もう担当の専門の先生がおられましたので、研究室にも集めてあり、ご自分が求めていらっしゃるのとはもとよりとしまして、広島大学、文理科大の附属図書館にも全部、国文学国語学はずいぶん文献、蒐集してあって、それは原爆にも焼けないで、残ったんですね。けれども国語教育の方はないんですね。専門は国語学を担当、国文学を担当ということでしたから。

そういうことで、明治の初めから昭和30年代くらいまでの、一年一年ごとにどういう国語教育の文献、国文学の文献、教育学、心理学の文献、それから教科書、というのがあったかについて、そういう基礎資料として国語教育の年表を作成するという。それはやはり研究室で一緒に勉強している人もいつてくれましたね。「先生、やはり一年一年どういうふうに明治の初めから今日まで、こう積み上げてきたのかについて、そのことを資料とする、そういう年表の作成というのがあるんじゃないでしょうか」というふうにいってくれましたね\*  
1. それで全面的に協力してくれまして、東京へ出まして、学習院の図書館、それから上野の方がありました国立国会図書館、その書庫へ入れてもらうんですね。

書庫へ入れてもらいますと、登録してある所蔵目録にはなくって、

\*1 これが、のち『国語教育史資料』の第6巻「年表」（東京法令、昭和56年）として結実する。

\*2 長野県師範学校訓導 與良熊太郎『小学校に於ける』話し方の理論及方法（光風館、明治35年11月）。

書庫には所蔵してあるというのがありまして。そのなかでやっぱり、話しことばの指導に関する文献が、長野師範、それから宮城県の仙台の宮城師範の師範学校の先生で、「話しことばの指導のあり方」というのを単行本にして発表しておられるというのがわかったんですね\*  
2. それまで、「読むことの指導、書くことの指導」というのは、ずっと熱心に行われてきたけれども、話すことの指導はほとんど顧みられなかった」というふうにいわれていたんですが、やっぱり学習院図書館とか国会図書館の書庫にまで入れてもらって一冊一冊ずつ調べていきますと、明治30年代すでに話しことばの指導というのが長野県と宮城県にすでにありましてね。

そういう資料が発見されたというときには、できるだけのやい時期に、全国大学国語教育学会で研究発表といいますが、調査報告の発表とかというのにとりあげていくことを、わたくし自身は心がけたんですがね。だから、学会の理事長も務めましたけれども、その理事長であつてもやっぱり研究発表を申し込んで、そのなかで、「いままで通念としてはこういうふうには、「この分野は開拓されていなかった」とか、「この分野は顧みられなかった」とかいうふうには、一般にはいわれたり、あるいは思い込まれているけれども、現実には、やはり長野県の方とか、あるいは宮城県の仙台の方とかでは、すでに明治30年代にこういう話すことの指導の報告がなされております」というのを、学会発表で報告しましてね、で、自分たちのそれ（国語教育関係の文献資料調査）が大事だということ……。

宮城県師範学校訓導 横山健三郎『話方教授之枝折』（東洋社、明治34年9月）。

宮城県師範学校教諭 増戸鶴吉（小学校に於ける）『国語科教授法』（弘文館、明治34年3月）。

関連の御論考に、「明治三〇年代の話しことばの教育―与良熊太郎のばあい―」（『広島大学教育学部紀要』、昭和37年）、「明治三〇年代の話しことばの教育―横山健三郎「話方教授之枝折」を中心に―」（『大分大学国語国文学会「国語の研究」第4号、昭和44年』、等がある。なお、『話しことば教育史研究』、

II 「明治後期話しことばの教育」、参照。

### ● 「個体史」研究（1）―『国語教育個体史研究』I・II・III

それからもう一つは、わたくしは大正9年、一九二〇年生まれなんです、その、一九二〇年生まれでここまで来たと言う時には、やはり、自分のする国語科の授業とか、そういうものは、やはり明治の初めから進められてきた、我が国における学校制度下に営まれた国語科の指導というものの、言ってみれば恩恵をうけてつていいですか、それがあから自分の取り組むことが、授業をすることができ、そういうことがあるんだというふうに考えて、それで、自分のした授業と、あるいは自分のした教材研究、自分のした、その指導のありようというのを、やはり大事に（記録して）進めていかなければならないというふうに考えて、それを、ずっと後になって用いられた「自分史」ということば、わたくしは個体発生の「個体史」というふうに、「国語教育個体史」というふうによんで、学会でもその発想、考え方で発表をして、いろんな御意見をいただくようなことを試みたんですがね。昭和27年の7月上旬に、ふっと、「あっ、今の自分というのは、我が国の明治以降の新しい国語教育に育てられてきたんだ、自力でというのではなくって、その歴史に育てられてきているんだ」ということ、したがって「自分が、営みというのとはちゃんと記録にまとめてあげなければならぬ」というふうに考えて……。

それで、（昭和）21年の9月から22年の3月までの新制中学校での

二学期三学期、それから三年生になってからの昭和22年の一学期二期三学期という、その間、五クラス二四八名、愛媛県松山の道後温泉の、道後の方にありました女学校（愛媛県立松山城北高等女学校）で授業をしたんですね。それで、23年の4月から母校へ、高等師範へ帰ってきたさいというふうになって、それで国語科教育を担当するというのは、高等師範に帰ってきて二年経って、新制大学が、国立新制大学が発足した、その年から国語科教育法というのを担当することになりましたんですね。そういうことで、28年に、こちらに帰りましてから28年の一年間かけて、新任教師として五クラス、松竹梅桜菊という五クラス二四八人の生徒たちにした授業、どういう授業をどういうふうに準備してどういうふうにしたのかつていうことを全部、それを「個体史研究」というふうにして……。

（昭和）27年の7月に「自分史」、「個体史」という発想を得て、28年一年間かけて書き下ろして、五クラス二四八人の、二年生の二学期三学期、三年生の、中三の一学期二学期三学期という五学期、それをして、それで、謄写印刷で刊行することになったんですが、三月と六月と九月というふうになりましたがね。けれど部厚なものですから、【間】その印刷費が大変なんです（笑）。どうしようかと思つたんですが、結局は、郷里は四国の愛媛県の田舎の方ですが\*1、そこで父

(伊佐夫氏、昭和22年9月6日逝去)が、山の、木を育ててたんですね。

その、山の木を売り、父は亡くなっておりましたので、それをしまし  
て、それで、印刷費を、都合しましてね\*2(笑)。それとあと、二  
四八人の生徒たち一人一人がどの頁にどういふふうに出ているのかつ

\*1 愛媛県喜多郡菅田村大竹(現、大洲市)

\*2 『幼児期の言語生活の実態』IV、昭和29年1月6日条、大洲での墓参り途次の会話に、「コノ ヤマワ ネ スミハレチャン ヤ テルキチャン ノ オ  
ヤマ ヨ。オーキナ ヤマ デシヨ。 (父↓)「ウン。ダレ ガ ウメタン? (父↓)「オジーチャン ト オバーチャン。 (父↓)「オジーチャン ガ  
ウメタン? (父↓)「オジーチャンガ ウエタン ヨ。 (父↓)「フン。(父↓)」とあり、「大洲の祖母のうち。祖父の墓まいりにいく途中、駄場の杉山  
を見せて、父が1の文のように言い、……」との解説が付されている【597頁上段】。

\*3 『野地潤家著作選集』2〜4(実践編1〜3)(明治図書、平成10年3月)所収。

### ●「個体史」研究(2)——『昭和前期中学校国語学習個体史』『国語教育実習個体史』

○『昭和前期中学校国語学習個体史—旧制大洲中学校(愛媛県)に学びて—』

(溪水社、平成14年)

○『国語教育実習個体史』(溪水社、昭和56年)

これが『昭和前期中学校国語学習個体史』、旧制中学校ですから、中  
学校一年から五年まで、新制になってから中学三年、高校三年だった  
んですが、旧制は小学校六年、中学校五年でことで、愛媛県の大洲の  
旧制中学校\*1で学んだ五年間のそれを、「国語学習史」といふふう  
にしました。前に見ていただいたこともありますが。

これが『国語教育実習個体史』、高等師範に入ってた教育実習、  
わたくしがうけた教育実習。九つ実地授業したんですけれどね。それ  
を全部、どういう準備をして、どういう授業をして、どういう指導助  
言をうけて、つていうことを、全部、記録していたもんですから。

それで、このきつかけになったのはですね、附属中等高等学校の方で  
「国語科で毎年、研究紀要『国語科研究紀要』を出します」と。そ

てことは全部分かるようにしたわけなんです。そういうことで実際  
にやりましたのが……。実際に見ていただきましょう。

○『国語教育個体史研究』I・II・III(白鳥社、昭和29年3月、6月、9月。

限定三〇〇部。孔版) \*3

### ●「個体史」研究(2)——『昭和前期中学校国語学習個体史』『国語教育実習個体史』

れで何か、もう教育学部に帰っておいりましたので、「学部の教官と  
して何か原稿を寄せてほしい」といわれて。それで、附属中学校で教  
育実習でたいへんお世話になりましたから。その教育実習の記録は、  
広島の下宿へ残していたら原爆でやられてるんですけど、郷里のわた  
くしの実家のほうへ帰っておいりましたので、また戦後こちらへもつて  
帰りましてね。丁度お世話になった附属中学校で研究紀要を出される  
という、で、「学部の教官として執筆してほしい」ということで、附  
属中学校の先生方にお世話になった、自分の受けた教育実習はどうい  
うふうに授業をし、あれしたのかということ、こうまとめて。

これも東京学芸大学と岡山大学と、東は東京学芸、西は岡山大学の  
教育学部に教育実習センターというのが設けられていて、そこで教育  
実習に関する資料などは集められてるんですが、自分の受けた実習  
でどういう資料が当時配付されたり、どういう授業をして、どうい  
う指導を受けたかということなどを、記録にまとめたものがまだない

です。その、原稿で記録としてまとめておられている方はおられるかもしれませんが、活字にして一般に報告を公にしましたのは、いまのところわたくしのこの『国語教育実習个体史』で。

四年になって実習にいくときに\*2、一年前の高等師範の三年生になったときから準備をはじめ、国語教育に関するもの、国語学に関する、そういう文献、だいたい広島市内の古木屋さんへ行行っては求めてきて、下宿へ戻って読んで、約九〇冊\*3、「実習にそなえて」という項目に、ずっと何年何月何日にどういう本をどう読んだという……。

ただ、その国語の授業をどうするかというこの基本的なこととか、具体的なことで大事なところとかって、この指導を受けておりませんので、ただ文献を初めから終わりまで必死になって読み通すのですけれども、それがすぐ実地にどう役立つかってところまでは

\*1 愛媛県立大洲中学校。先生のご卒業は昭和13年3月(『野地潤家先生に学びて』所載「野地潤家先生略年譜」)。

\*2 昭和17年の6〜7月。附属国民学校(指導教官・田上新吉先生)・附属中学校(指導教官・瀬群敦(統三)先生、満鉄鉄夫先生、小谷等先生)。中学校で漢文(頼山陽の詩)で研究授業(『野地潤家先生に学びて』所載「野地潤家先生略年譜」)。

\*3 昭和16年の通読冊数は一四三冊(『野地潤家先生に学びて』所載「野地潤家先生略年譜」)。

### ●『幼児期の言語生活の実態』(2)

西尾実先生がですね、「国語教育を本当にやろうと思えば、子どもが実際にどういふことを習得しているのかってことを踏まえないでは、授業のやりかたをこう思い描いて、いい授業をしようというだけでは十分ではない」ということをおっしゃって、で、長男が生まれたとき、昭和23年の3月9日生まれなんです、ひところ、言葉をいうようになりましてから、満六歳にいくまでの。それが一人の子どものことを記録したのはこれだけ。『幼児期の言語生活の実態』

……。実際に役立てられたかというところはいかなかったんですけどね。それでもやっぱりこれは、いま顧みると、「自分の授業というのはこういうところからスタートしたんだ」ということなど、全部あらしましてね。

このときはやっぱり、父親が育ててくれた杉山の本を売りましてね、それで印刷費を……。わたくしはやっぱり、出版社から本を出すと、印刷経費を出すという、そういうことはなかなかできません。そうしますと、学会発表はしましたが、その実際をまとめて報告するということが、もうなかなかいかないもんですからね。わたくしはもう自腹を切って、自分の研究は自分の力で報告していくというふうにして、すすめるようにいたしました。その点ではやはり、結果的にはそのことがよかったと思いますよね。

I II III IVと四冊になっていましてね。どうぞ見てください。もう見たいだいたいもいると思います……。

○『幼児期の言語生活の実態』(文化評論出版、昭和48〜52年)

子どものことばというのを、それまでは心理学の先生が、ボキャブラリー本位で、語彙本位で、何語習得したっていう報告はすであつたんですが、センテンス毎に、場面毎に、会話を、こう話しかけてこう応えてということの、あれはなかった、これが初めてだったんです

ね。」

で、それを出しまして、地元の広島出版社から出しましたら、アメリカのイリノイ大学の方から、イリノイ大学は、アメリカとドイツが子どもの言葉の調査研究では進んでいたんですが、そういうデータベースがあったのですが、こういう四冊の『幼児期の言語生活の実態』という、四冊の本を出したときに、反応、日本ではほとんど反応がないんですが、アメリカはあるんです。コロラド大学に勤めていた方が、佐賀の方で実地調査をしておられて、わざわざここまで、広島まで寄られて、ご婦人の先生でしたが……。で、わたくしが報告した満二歳の時期よりもう少し前の子どものことばのそれを知りたいということ。その時はまだ、こちらとしては印刷所に入っていたんですね。できあがったのは二歳の方を先に出版しましたから。そのかたはそれをコロラド大学の方でご覧になって、佐賀に実地調査にいかれるのにわざわざうちまで寄っていただいて、それでもう少し満二歳より前の時期はどういう言葉を使っていたのかということ、それはこちらとしては印刷所に入ってまだ印刷過程にあつたんですね。それは後でお知らせすることにしたのですが。

そういうことで、アメリカとドイツが進んでいたんですが、一人の

\*1 『幼児期の言語生活の実態』中、原爆にかかわる発話は、昭和29年8月6日条「ゲンシバクダン ガ オチタ トキ クモ ガ ドー ナツタン?」(↓母)「オヒサンガ カクレテ シマツテ ネ コンナニ ナツタン ヨ。コレ ミテ ゴラン。」(母↓)「解説「午後九時・一五ころ。1の文のように母にきく。」

母は新聞の写真(原爆投下後の)を見せて、2の文のように言い、3の文のように言う。」【同IV721頁上(下段)】、同9日条「ゲンシバクダン ガ オチタ

トキ ハマモト ノ オバチャン ワ ドコ ニ オッタ カ?」(↓竹原のケイコちゃん)「シラン(竹原のケイコちゃん)」「ボクラ ノー イナカ ニ

ウマレタ ケン ノー イナカ ニ ウマレテ ココ ニ キタ ケン ノー ケガ センカッタんぜ。(↓竹原のケイコちゃん)」「ゲンシバクダン デ

ケガ シテ ノー オイシャ ニ イツテ ノー タスカッタんぜ、ハマモトノ オジチャン モ オバチャン モ。(↓竹原のケイコちゃん)」「……

……。(竹原のケイコちゃん)」「【同IV726頁上段】に見える。また、同年12月16日条には、「カーチャン ボクラ ガ オジーサンゴロ ニ ナツテ センソ

ー ガ アルン?」(↓母)「……。(母↓)」「ネ、ナイ?」(↓母)「……。(母↓)」「【同IV782上段】の発話も見える。

子どもの満六歳までの会話場面というのを、全部こういうふう(に)四冊にまとめてというのは、これが初めてですね。で、イリノイ大学にそれを納めてあるということ。こちらとしては、やはり原爆ですべてが崩れてしまったといわれている、広島で、七〇年は草木も生えないかも知れないといわれてたその時期に、広島で幼児期を過ごした長男の言葉というものを、こう採りまして……\*1。

アメリカ、ワシントンの国会図書館にいきまして、その地下の書庫に入ったら、書棚の、上の所に『幼児期の言語生活の実態』四冊がずらつとならんでいて、それをカードを採っていて手伝っていた家内も一緒でしたからね、びっくりしましてね。それで、どうしてアメリカというのはそういうことに早いな。日本は全然そういうこと……。

日本の場合も国会図書館には全四巻納めますけれどもね。だからやっぱり、教育と研究というのを、こうずっとその国々の関係者が全力傾注で進めていられるんですが、このことはほんとに油断できないという、もうこれでいいんだとかいうふう(に)自分で安心したり、そういうふうにしたらもう、つまり前進、前へ進めなくなってしまう……。で、後れてしまふとなかなか取り返しは、取り返そうと思ってもできませんですよ。そういう点で……。



## ●広島高等師範学校着任のころ

それにしましてもやっぱり、その（昭和）23年の時点で、やはり、母校へ、高等師範学校へ帰ってきて、すすめてほしいというふうには、こう、先生から、母校へ帰るようにというようなことを言っていたらききましたのね。で、はじめはやはり、国語科教育法というのは新制大学になってからでしたから、昭和23年に高等師範へ帰った時点ではまだ、古今和歌集ですとか、それから、実際に西鶴のものとかというふうな、そういう国文学の講読が多かったんですね。それで、あの、呼んでくださった恩師の方は、「若いときは何でもやるもんだ」とか言われて（笑）。それで必死になって、それを……。そうすると文献が焼かれて、原爆の後ですから残っていないんですね。そうすると、駅の近くまで、白島の九軒町のあたりの古本屋さんとか、そういうところに出向いては（書物を買入れ）、持って帰って、徹夜で準備をして、授業に臨むというようなことが、続きましたね。結局、古事記も担当するということになって、古事記も古今和歌集も平家物語もつていうようなふうには、「若いときの苦労は買ってでもするもんだ」とかって、先生おっしゃって、それをしたんですね。

そういうふうにはしていませんと、その、追試験の時に休んでしまっただけでこれなくて、再試験はしなかったもんですから、で、四年生でしたから、この成績が出ないと卒業できない、というときだったんですね。それで、再試験はできない、レポートを提出するというそういう制度もない、と。わたくしは『どうしようかな』って思ったんですが……。福岡県から高等師範に来ていた人だったんですが。わたくしは出席をとるかわりに、その時間の受講感想を書いて出してもらって、そうしたら出席して受講したということが分かりますから、出席はとらないでいたんですが、その人が、「この古事記の時間の、学問的な

雰囲気が好きで、わたくしは授業に出てきました」っていう。出席はとらないもんですから、その人が毎時間出ているのか出ていないのか分からなかったんですが、感想をみますと、「学問的な雰囲気が思い出されて、出てきました」というのが、その時間の感想に書いてありました。それがずっと頭に残っていたんですね。しかし最終試験にその人は出てないもんですから、その成績を出さないと卒業できないということになって……。で、結局は、その、わたくしが同僚の先生、他の先生から「試験を受けていないのにどうして成績を出したか」といわれたときには、もう返す言葉がないんですね。わたくし自身への言葉としては「わたくしの古事記の授業の、学問的な雰囲気が恋しくなって、また、この時間出てきました」っていうふうには書いてくれたのが、その授業というものを受けるときに、自分の授業をそう受けてとめてあれしてもらったんだということが印象に残っている、そういうことを唯一の拠り所にして、成績を出して、卒業できて、福岡の方へ帰っていったんですね。

山登りが好きでよく山登りもして、山登りをして俳句を作ったり歌を作ったりなどをしておりました。その人が、ちょうど皆実町の被服廠のところへ、高等師範は教室をかりて授業をしておりましたから、わたくしが行きますと向こうから、彼が来るんですね。わたくしはこちから誰かもう一人あれしていたと思います。歩いて、ずうっと通過しようという、その時期になった時に、きちっと立ち止まって深々とお辞儀をしますね。その、「最終試験を受けなかったのに試験を受けたと同じような扱いにもらった」ということはもう分かっていたわけですね。わたくしは最初分かりませんが、ちよっと立ち止まってこころ深々とお辞儀をして帰っていくということがありまして。

実際に、そういう授業というものをどういうふうにあれしていくのかということについては、やはり、その時その時にいろいろのあれが

※『幼児期の言語生活の実態』には、在學生や卒業生が先生のお宅を訪問した場面も多く記録されている。昭和26年1月17日、同25日【以上、同Ⅲ】、4月24日、5月7日、6月3日、8月29日、同27年1月7日【以上、同Ⅳ】、等。

補 昭和26年6月17日(日)条(三年四ヶ月―9)『幼児期の言語生活の実態』Ⅲ 206頁上々下段】

解説「午前八・一六ころ〜八・二三ころ。同前(引用者補「父や弟(照樹)と三人で、近くの蓮池のほうに散歩に出かける」。蓮池で三〇羽ばかりあひるが泳いでいるのを見る。(以下略)」

- ホラ アヒルカ。オヨイデル デシヨ。 (父↓)
- ウン。(↓父)
- アヒル ヨ。アヒル、イッテ ゴラン。(父↓)
- アイル。(↓父)
- アヒル モット オーキイ コエデ イッテ ゴラン。(父↓)
- アイル。(↓父)
- ソ。アヒルカ。アサノ ゴハンオ タベテル ノヨ。(父)
- ウン。(↓父)
- アンヨ ドコ ニ アルン? (↓父)
- ホラ ミテ ゴラン。スコシ ミエテル デシヨ。 (父↓)
- オクチ パクパク シテル デシヨ。 (父↓)
- オフネ ミタイ ジャネ。(↓父)
- ソ。オフネミタイニ オヨイデ イクネ。(父↓)
- ホラ アカッテ キタ ヨ。(父↓)
- マタ ハイル ヨ。(↓父)
- アレ オヨマ ニ アガッテル ノヨ。(↓父)
- トンネル ミタイ。(↓父)
- ソ。ミドリノ ハツパノ トンネルオ トーッテ イクネ。(父↓)
- アヒルサン ノ オウチ ドコ? (↓父)
- ドコ デシヨ。ネ。(父↓)
- ドー イッテ ナイテ イル? (↓父)
- ワカラン。(父↓)
- グア グア グア ト ナイテル デシヨ。(父↓)
- マー カワイーネ。(よその女兒(小学校五六年生) ↓男児)
- ワーツ。(男児 ↓ 女兒)
- エツト オルネ。(女兒 ↓ 男児)

\*「オヨマ」：居間。